

2024年度 小・中学生

「いのち」の作文コンクール



JR西日本あんしん社会財団 2024年度小・中学生「いのち」の作文コンクール 作品集

公益財団法人 JR-West Relief Foundation
JR西日本あんしん社会財団

作品集

—— さくひんしゅう ——

公益財団法人 JR-West Relief Foundation
JR西日本あんしん社会財団

ごあいさつ

公益財団法人 JR西日本あんしん社会財団

理事長 来島達夫

当財団は、2005年にJR西日本が惹き起こした福知山線列車事故の反省から設立され、「いのち」や「こころ」、「安全」をテーマに様々な活動を行っております。

本コンクールは、作文を通じて将来を担う小・中学生の皆さんに「いのち」の大切さを考えていただくとともに、それにより「いのち」を大切に作る安全で安心できる社会づくりにつなげていきたい、という思いを込めて、近畿2府4県で募集しており、6回目を迎えた今回は4千5百余の応募をいただきました。

今回は、大切な人やペットなどのいのちに関する作品が多かったことに加え、日々の何気ない会話を通じて感じた、生きることに楽しさなどに触れた作品も増えました。

小・中学生の皆さんが感じる様々な「いのち」に、皆さん一人ひとりが真剣に向き合い、考えているからこそ、今回もまた、心に訴える数多くの作品に出会うことができました。皆さんのいのちの尊さや生きることへの思いが込められており、主催者として大変嬉しく思います。

コンクールの実施にあたり、ご指導いただきました学校関係者の皆様、並びにご家族の皆様ほか、多くの方々からのご協力を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

本作品集への掲載は、ご応募いただいた作品の一部ですが、小・中学生の皆さんはもちろん、広く多くの方々に「いのち」について考えるきっかけにさせていただければ幸いです。

目次

CONTENTS

●いのちの作文大賞(4名)	4
●優秀賞・選考委員特別賞(6名)	22
●優秀賞(20名)	34
●入選(70名)	60
●選考を終えて	66

いのちの作文大賞

(小学生 一・二年生)

いろいろないのち

野洲市立野洲小学校 二年三組 上田 麻祐子

夏休みになって、家族と近くのお祭りへ行った。私と弟は金魚すくいをした。一ぴきもすくえなかったが、店のおじさんが一ぴきずつくれた。家に帰り、お父さんにバケツと水を用意してもらった。弟はお父さんに、「明日、いっしょにブックブックを買いに行こう。」と約束していた。でも、次の朝、起きてバケツをのぞきこむと、弟の金魚は固くなってういていた。弟は、すごく泣いていた。でも私は弟の金魚だったので、あまり悲しくなかった。むしろ、私の金魚が生きていてよかったと思った。それより、死んだ金魚がこわかったので、弟に「早くほかして」と言った。弟はさらに泣いた。それから三日ほどたって、私の金魚もフラフラと泳ぐようになってエサも食べなくなった。もうすぐ、この金魚も死ぬのかと思うと急に悲しくなった。次の日、私の金魚も死んだ。やっと弟の気持ちがわかった。

その日の夜、お父さんがかいてんずしにつれていってくれた。どのおすしもおいしかったが、サーモンが一番おいしかった。でも、サーモンをとりすぎて残してしまった。お母さんに、「サーモンも金魚と同じで生きていたんだよ。」と言われ、わすれていた金魚のことを思い出した。少しいやな気持ちになった。金魚もサーモンも同じ魚なのに、死んだとき、あまり悲しくないときもあれば、すごく悲しいときもあるし、何も思わないときもある。同じいのちなのに、なぜだかわからない。ただ、私が残したサーモンも家族がいて、悲しんでくれるだけかいたのかなと思うと、何だか悪いことをした気持ちになった。いのちがなくなるときのかんじ方は、いろいろだからこそ、どのいのちも大じにしないといけないと思う

た。

でも、やっぱりサーモンがすき。これからは、食べられる分だけお皿をとろうと思う。

講評

弟と自分が育てていた金魚が死んでしまった体験が、別の日の回転寿司の場面に活かされていることが読み取れる作品。金魚もサーモンも同じいのちなのに、それが亡くなったときの感じ方が違うからこそ、どのいのちも大事にしないと気づいた。いのちの大切さを理解したうえで、「でも、やっぱりサーモンがすき。これからは、食べられる分だけお皿をとろうと思う」と無邪気に結んだところに子どもらしさを感じられ、好感が持てる。



いのちの作文大賞

(小学生 三・四年生)

オナガミズアオ飼育記

大阪市立春日出小学校 四年一組 森

治己

ぼくのしゅみは昆虫の採集、飼育、標本作りです。6月のある日、昆虫採集に山の湿原に行ったとき体長5mmほどのオナガミズアオの幼虫を見つけました。オナガミズアオは前翅長12cmにもなる大きな蛾で、その翅は美しい水色をしています。ぼくは飼育しようと思い、何匹か持ち帰りました。

幼虫が食べる植物は湿原などにしか生えないハンノキの葉でぼくの住む地いきには生えていません。幼虫はとても大食漢です。たくさん食べて、すぐに体長5cmほどになりました。ぼくは毎回採集に行ったとき、えさとなるハンノキを持ち帰っていました。

ある日、学校から帰り水そうをのぞくとハンノキがなくなっていました。幼虫はもぞもぞと動き回りえさを探しています。すぐに食べさせないと死んでしまうかもしれません。ぼくはお母さんにたのんで車でつかまえた山につれていってもらいました。幼虫3匹もいっしょです。その車はまるできゅう急車のようでした。山につくと、いそいでハンノキをケースに入れました。幼虫たちは元気にもぐもぐ食べ始めたのでぼくはほっとしました。

それからしばらくして2匹がまゆになりました。のこりの1匹はまだ小さくえさを食べ続けていました。まゆになるまであともう少しのところ、保ぞんしていたハンノキが全くなくなってしまいました。その日から岡山県に昆虫採集に行くことになっていたので、また幼虫もいっしょに車でつれていくことにしました。どこかにハンノキがないか探していると、ようやくオナガミズアオの食草であるヤシヤブシを見つけました。食べてくれるか心配でし

だが、次の朝ケースを見てみると、まゆになっていました。

8月に入ったある日、水そうをのぞくと水色の大きな蛾が出てきていました。とてもきれいなオスでした。それから数日後、のこりの2匹も羽化しました。オスとメスでした。成虫は口がなく、えさを食べることができません。あれだけえさをとるのに苦ろうしたのに成虫になるとえさを食べず、1週間ほどで死んでしまうのです。ぼくは生き物たちが子そんをのこし、命をつなぐために生まれてきたのだなと深く感じました。

オナガミズアオは死んでしまいましたが、水そうの中には、たまごがありました。ぶじ生まれるかはわかりませんが、生まれたらまたハンノキをとりにいこうと思います。

講評

蛾の一種である美しい水色の翅をもつオナガミズアオの幼虫を飼育。昆虫が大好きで本気で入れ込む作者の様子がありと目に浮かぶ。お母さんに頼んで車で山に連れていってもらい、必死にエサとなるハンノキの葉を探して見つける様など、決して妥協することなく、なんとか幼虫を成虫にしようと、とことん育てたという行動力に拍手。「オナガミズアオ飼育記」という小学校中学年らしいあっけらかんとしたタイトルも好印象。



父のユニホーム

栗東市立葉山東小学校 六年二組 大田 爽月

私には父との思い出がありません。

父は私が二才の時、交通事故で亡くなりました。夏休みがはじまってすぐの早朝、音がひびくような大雨の日でした。我が家は夏休みが始まると、毎年お参りの人が来てくれ、父の写真の前はお供えでいっぱいです。父のユニホームがかざられた部屋で父の活やくをみんな話しているのが不思議でした。そんな野球の話ばかりの我が家で育った私はいつのまにか野球のルールを覚え野球観戦が大好きで、高校野球のマネージャーになるのが夢の一つです。この夏も兄の野球部の応えんに行きました。その時、何人かのおじさんが近づいて来て、母

はその方達と話して号泣したのです。不思議に思っておじさん達の顔を見ると、おじさん達は目になみだを浮かべていました。兄が高校で野球をがんばっていると聞き、父の分まで応援したいと、みんな来てくれました。おじさん達は試合が終わると「お父さんはすごいピッチャーやったんやで。」お兄ちゃん、強ごう校でようがんばつとるな!! えらいもんや!! 来年は甲子園一緒に行こな!!」となみだを流していました。野球場の帰り道、母が父と兄の思い出を話してくれました。兄は父が亡くなってすぐは、ボールもさわれず、父のユニホームを見ては泣いていたそうです。そんな兄を見ておじさん達は変わるがわる兄とキャッチボールしに家に来てくれ、兄は野球を続けることができたそうです。兄は辛いことがあれば、父のユニホームを見ていたのを思い出しました。兄は体が小さく、高校野球でレギュラーになるのがむずかしいと言われながらも、手にいっぱいママを作ってがんばっています。父との思い出があるからこそ、くるしんだ兄。今も父とのキャッチボールを続けているんだと

いのちの作文大賞

(小学生 五・六年生)

思います。そんなすてきな父と兄だから、おじさん達はずっとずっと応えんしてくれているのだと思います。家に帰って見た父のユニホームはどんなユニホームよりかっこいいと思いました。父のユニホームの前で母と手を合わせていると、父が横にいるような気がしました。当たり前前の毎日なんてないのです。一番大切なのは、今日一日を大切に生きること。そして、この命に感謝することです。父が生きられなかった今日を、私はたくさんの人に支えられて生きています。どの命にもたくさん愛情と優しさがあふれ、人は支え合っていることを学びました。父が私に残してくれた物は、思い以上に大切な宝物でした。

「パパ、見ていますか？そよぎはさみしくありません。たくさんの方がパパの分まで、愛情をくれます。それは、パパが生きていた時に、たくさん愛情をみんなにあげたからだと思います。私もいつか、人に「ありがとう」と言われる看護師になって命の大切さをつないでいきます。ずっとずっと見守っていてね。そよぎはパパが大好きです。」

講評

観念的である「いのち」を、作者としてそれを象徴する題材に、幼い時に事故で亡くなった父が着ていた「ユニホーム」を採り上げている。家族以外にも、父と縁のあった多くの人の存在が自分を支えてくれており、そうした人々とのかわりの中で父からの分まで愛情を受け、今の自分がいるということを綴っている。限られた枚数の中で父を亡くしてからの長い時間の流れがうまく描かれている点は、本コンクールでも稀有である。

いのちの作文大賞 (中学生)

母のお腹、妹の声

加古川市立氷丘中学校 二年三組 宮崎 純大

僕の妹は、いま三歳。

三年前、僕は小学生。大きくなる母のお腹を、不思議な気持ちで見ている。

お腹の中に命がある。女の人は、お腹に命を宿すことができる。僕自身の命をふくめ、人間の生命がそうやって続いてきたことを知ってはいるけれど、母の大きなお腹は毎日僕に、命そのものの存在を語りかけた。はっきりと。しっかりと。

妹が母のお腹を続けて何度か蹴ったとき、僕は母のお腹に手を置いた。ちいさなちいさな振動が手のひら全体に伝わった。そのときはやく妹に会いたいと思った。父も一緒にいて、笑っているのか泣いているのか、その半々の表情をしていた。

妹が生まれた日、僕は祖父母の家で知らせを待っていた。コロナ禍の真っ只中であつたときで、母について病院へ行けるのは父ひとりだけだった。

出産は命がけの行為であることを、父から聞いていた。もし母になにかあつたら、と考えたが、すぐにそれを打ち消すようにした。

出産予定日をかなり過ぎていたので、母は病院と相談をし、出産の日を決めていた。その前日の夜、お風呂から上がってゆっくりしていた母の横に行き、妹はいまお腹の中で何をしているのだろう、眠っているのかなと思しながら、僕は黙っていた。母と話そうとしたけれど、言葉は出てこなかった。

母は僕の頭にゆっくりと手を置いて、おやすみと言った。僕もおやすみとだけ言い、自分の部屋へ戻った。布団に入り、目をつむった後、母の顔を見ておやすみと言えばよかったと

いのちの作文大賞 (中学生)

思った。

「生まれたで。元気な赤ちゃん」

父から祖父に電話があったのは、夕方頃だった。祖父は、何度もよかったよかったと言って泣いた。僕は、涙は出なかったけれど、心の底から安心した。コロナウイルスに関わる暗いニュースばかりのなかで、胸の中が光で明るくなった。その光は、今まで見たことのない色をしていた。はやく母と妹の元気な顔が見たいと思った。

母が退院をする日。父と病院の受付で待っていた。座ってはいられなかった。

看護師の人と一緒に、母が降りてきた。大切に妹を抱いて。妹は目をつむっていた。

「抱っこしてみる？」

母の言葉に、僕は腕を伸ばした。

想像していたよりもずっと軽くて、小さくて。命が誕生したのだと思った。

家に帰って、父が僕と妹の写真を撮った。

僕が抱っこをすると、妹は泣いた。大きな声で、顔をくしゃくしゃにして。その顔と声から、僕は生命力というものを感じた。それはとても力強く、たくましかった。小さな体なのに、はっきりとした妹の泣き顔と泣き声。

僕は、自然と笑みがこぼれた。これまで経験したことのない、優しい気持ちがあふれてきた。

父が撮った写真を見て、僕は自分の表情に驚いた。自分から見ても、いい顔。とても穏やかに笑っていたからだ。

いのちの作文大賞 (中学生)

僕の笑顔と、妹の泣き顔。写ってはいないけれど、見守る父と母。家族四人のいのちがつ

まった、一枚の写真ができた。

僕はぺたんこになった母のお腹を見た

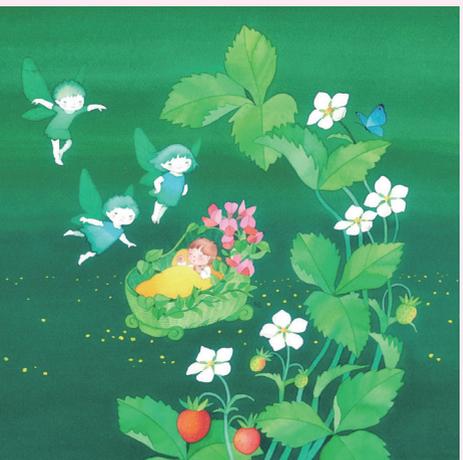
「お兄ちゃん」

そう笑いながら、母は僕に言った。ちいさな命が、すぐ目の前にあった。

妹が泣いて、僕は兄になった。

講評

妹、弟の誕生について書かれた作品は数多い中、自分が素直に感じたことを素直に表現しており、妹が誕生したことへの作者の喜びや優しさがストレートに伝わってくる点が高く評価された。妹が生まれた場面、妹が退院して家に帰った場面など、場面ごとの情景もはっきりと目に浮かぶ。最後の父が撮ってくれた自分の笑顔と妹の泣き顔が写る写真を見て、自分自身がとても穏やかに笑っていることに驚くシーンも非常に印象的である。



ぼくのおとうと

姫路市立白浜小学校 一年三組 福井 達央

おかあさんがくろとしろのちいさなしゃしんをみせてくれました。さいしょはなにかわからなかったけど、おかあさんが「かかのおなかのなかにいるあかちゃんのしゃしんだよ。」といいました。ぼくはとてもうれいきもちになりました。

なつやすみ、ぼくはびょういんについていきました。おいしゃさんがおかあさんのおなかをもしもすると、どうがであかちゃんが見えました。ぼくぼくしたものがあつて、「これがしんぞうだよ。」とおしえてくれました。めとかはなとかくちがあるのがわかつて、かわいいなどおもいました。おとうとのあきどいっしょに、ふくいまめペペとなまえをつけました。

べつのひにまたびょういんにいくと、おいしゃさんが「しんぞうがうごいていない。」といいました。ぼくは、

どうしてしんぞうがとまったのかなとおもいました。おかあさんにきいても「わからない。でも、もうげんきにうまれてこないんだって。」といいました。おかあさんがないちゃつて、ぼくもかなしくなつてなきました。

そのあと、おかあさんはびょういんでまめペペをうみました。まめペペは、ここにはいつておうちにきました。てがちいさくてかえるみたいで、すぐくわいかつたです。いっしょにあそびたかつたけど、おはかにいれました。おとうさんもおかあさんもぼくもたくさんなきました。

まめペペはおとこのこでした。だからぼくのおとうとです。まめペペはくものうえにいっちゃんたけど、ぼくはずつとわすれません。またきてほしいです。こんどは、いっしょにあそびたいです。おふるもいっしょにはいりたいです。またあいたいです。

講評

生まれてくるはずだった弟の「まめペペ」を想い、また会いたい気持ちを綴る。「てがちいさくてかえるみたいで」といった比喩表現もさることながら、「またきてほしいです。こんどは、いっしょにあそびたいです。おふるもいっしょにはいりたいです。またあいたいです。」という心に沁みる素直で印象的な文末の表現などは、小学校低学年だからこそそのものではないだろうか。作者が成長してからもぜひ読み返してみてほしい作品。



わたしのお母さん

私立智辯学園和歌山小学校 二年二組 脇島田 乙希

わたしのお母さんは、とてもやさしいです。いつもおいしいおべんとうやごはんをつくってくれるし、なんでもできるお母さんです。そんなお母さんは、かんごしきさんです。でも、さいきんしごとをやめてずっと家にいます。家のことやわたしたちのことをするために大すきなしごとをやめました。毎日お母さんは、しごとについてた時より元気ありません。

「あのおばあちゃん元気かな。」
「といたりします。なんか元気がないけどごはんや家のこと、宿題をいっしょにしてくれたりするのは、しごとをしていた時よりよくしてくれます。おねえちゃんたちは、それにあまえて、お母さんによくたのみごとをしています。わたしはしごとについて、おじいちゃんやおばあちゃんたちのおせわをしています。お母さんのおせわをしているお母さんのほうがすきです。お母さ

んは、たまにだれかがなくなってしまう時になきます。そしています。

「いのちっていつなくなるかわからないからいまをだいじにしてね。」
とわたしの手をにぎってくれます。そんないのちのことをかんがえられるしごとをしているお母さんはキラキラしています。わたしもおねえちゃん二人も、おかあさんからのちがどれだけ大せつかをしごとのお話でよくかんがえます。人がなくなる前の話、どれだけの人がかなしむのか。いのちにむきあって、そのひとのためにかんごするお母さんは、わたしたちのじまんのお母さんです。

講評

看護師である母とのやり取りを通して、一貫した母へのリスペクトの気持ちを描かれている。「お母さんはしごとについてた時より元気がありません」や、「わたしはしごとについて、おじいちゃんやおばあちゃんたちのおせわをしているお母さんのほうがすきです」など、日ごろから母のことをよく見ていることが読み取れ、だからこそそ心からのリスペクトの気持ちを作文に表すことができたと感じられる作文である。



命について考えた日

たつの市立神部小学校 六年一組 武内 誠

僕が生まれた日は平成二十五年の三月十一日。僕が生まれる二年前のこの日、東北地方でマグニチュード九・〇の大きな地震が起こり、大津波が発生した。甚大な被害が出た。亡くなった方は約一万九千人以上もおられ、今も行方不明の方が二千五百人もおられる。

そんな平成二十三年の三月十一日、僕のお母さんは姫路市にある産婦人科に行った。そろそろ赤ちゃんを授かりたいと思っていたので、仕事を半日休んで、きちんと相談に行ってみようと思ったらしい。受付で順番を待っていたお母さんは、十年ぶりに学生時代に仲の良かった友人にばったり再会した。その友人は臨月で、一週間後がもう出産予定日だったので、最後の健診の予定だったそう。友人も不妊治療をがんばった末に授かった赤ちゃんで、お母さんは待っている間に色々な話を聞かせてもらったことで、不安

だった気持ちが少し軽くなったし、何より励まされたという。

待合室には妊婦さんがたくさんいたし、退院で幸せそうに帰っていく赤ちゃんとママさん達を見て、これからスタートする自分もがんばろうと思ったそうだ。

偶然の嬉しい再会で前向きな気持ちで診察に向き合えたし、午後も意気揚々と出勤したお母さんは、二時四十六分の東日本大震災の発生を職場で聞いて知った。

騒然とする中で、お母さんも職場にあったテレビを見た。発生からすぐにテレビでは壮絶な映像が流れていた。津波の濁流の映像を見て背筋が凍ったらしい。朝はたくさん命に向き合っている女の人たちに会ってきたのに、新しく生まれてきた赤ちゃんを見てこれから自分が授かる赤ちゃんに思いを馳せていたのに同じ日にこんな一瞬にしてたく

さんの命が奪われる映像を見て胸が締めつけられる思いがしたそうです。そして、たくさんの方の命の無事を祈ったそうです。

お母さんが仕事から帰宅後に改めて見た震災のニュースは最初に見た時より被害の大きさが分かる映像でした。命の始まりを考えた日に、まさかのたくさんの方の命が奪われるような震災が起こってしまったって強く記憶に残る一日だった。命について日本中が考える日だったと思う、とお母さんは振り返る。

その震災から二年後の平成二十五年三月十一日の午後、僕は生まれた。予定日より少し早かった。僕が無事に生まれたことが本当にうれしかったし、お母さんにしてくれてありがとうと心から感謝する気持ちだったと教えてくれた。

僕が生まれた日、ニュースはやっぱり震災関連のことがメインで色々考えさせられることがあったけど、この2年を振り返ったお母さんは三月十一日という偶然にも深く考えさせられたという。僕も思う。二年前の同じ日、東北で無事に生まれることができた赤ちゃんはいただろうか。震災の津波に巻き込まれてしまった、生まれることができなかった赤ちゃんとお母さんだっていたはずだから。僕

は命のことを考える。たくさんの方が、命についていろんな立場でたくさん考えた日だと思う。

お母さんは、「命についてたくさん考える日に生まれた僕だからこそ、命を大切に考える人であってほしいと願っている」と僕に教えてくれました。命を大切に。これからも僕は、命についてずっと考えていきたいと思っています。

講評

母が不妊治療のために産婦人科に行った日が東日本大震災の日であったこと、偶然にもそのちょうど2年後の3月11日に自分が誕生したことを重ね合わせている。そして、母と自分自身の経験から、未曾有の大災害の中で生まれることができなかったいのちに思いを馳せており、忘れることのないであろうこの偶然を持つ作者ならではの視点でいのちの大切さについて考え、作文として表したことを評価したい。

私が生きる理由

彦根市立中央中学校 一年三組 山本 蒼依

私は生きていることが嫌になる時がある。毎日無理をして生きていくからだ。

小学校に入学してすぐの頃、幼稚園との違いを感じた。それは空気だ。学校に行く度にどんどん息苦しくなってきた。クラスメイトも担任の先生も見ただけで心が痛かった。二学期に入る頃には教室に入ることもつらくなって半不登校の学校生活が始まってしまった。過ごしやすくするために耳栓を使い始めたり、自分の気質を理解することで心の状態が良くなってきた矢先に、コロナウイルスが流行しスティーホーム期間になってしまった。その期間でほとんど心もつらくなってしまい、初めて生きている事の意味が分からなくなつた。外出自粛期間が終わる頃には学校が怖くなっていた。その気持ちを抱えていても形を変えながらなんとか学校に行き、毎日を過ごしていた。四年生の頃には自分の

つらさを理解してくれている友達もできた。六年生になった春、私は起立性調節障害と診断された。この病気とこれからは過ごさないといけないのかと少し絶望した。でも、これまでの症状の原因が分かかってスッキリしていた。それから自分のペースで学校に行き続け、ついに小学校を卒業し中学生になった。自分の心が少しでも楽になるようにと思い支援学級に入った。小学校よりも良くなったところもたくさんあるが、自分をもっと苦しめてしまった部分がある。それはキャラクターだ。同級生のメンバーや先輩達よりも性格がしっかりしていたり、勉強が周りに比べればできる方である事からか真面目キャラがうってしまつた。小学校の時もあつたが、中学校に入ってからそのキャラで苦しむ事が多くなつた。先生達にも「できるでしょ。」と期待をされている。でも私は期待される事が苦手だ。期待

んでいきたい。

講評

学校生活で感じる生き辛さ。中学に入って「真面目キャラ」がつき、その期待に応えねばと無理をしてしまうなど、自分の正直な気持ちを思い描く。多くの子どもたちも同じようなことで悩んでいるのではないかと考えられる中、同世代の子どもたちも共感できる内容である。またそれにとどまらず、そんな自分だからこそ分かることもあるとして、心理カウンセラーを目指すという将来について前向きに考える姿にも心打たれるものがある。

に応えようと必死になり自分が無理をしてしまい、いつも同じような失敗をくり返してしまう。本当は苦しいし今すぐ辞めたい。でもそれを隠すために半分偽りの自分で過ごしているから素を中々出せていけない。だから家に帰って自分の部屋に戻ると落ち込んで泣く事が日常茶飯事だ。今でも生きている事がつらくなつて死ぬ事まで考えてしまう時もある。それでも生きようと思えるのは、私の夢や目標がまだ達成できていないからだ。周りから見ると小さい目標や、大きすぎる夢だと思われるかもしれない。その中でも一番大きくて大切にしている目標を紹介しようと思う。それは、「後悔のない人生にする事」だ。今の自分には後悔している事がたくさんあるし、夢もまだ叶っていないから死ねない。そう思えるから生きられている。

この世界に生きている人はみんなどこかでつらい気持ちになる時があると思う。そのつらさが大きくなっていくと考える事もどんどんエスカレートしていき、「死にたい」という言葉が浮かび上がり自殺を実行してしまう人がいる。私はそんな人達を少しでも減らしたいと思い、心理カウンセラーを目指している。何度も何度もつらいと思った事がある私だから分かる問題も多数あるだろう。今は夢の一步として自分をもっと知って「生きる」事の大切さを学



あなたがいた時間

京都市立加茂川中学校 二年六組 杉 いおり

「今日も笑ってる？」 大好きな青空を見上げて、私は時々そう呼びかける。私の大切な友達がそこにいるからだ。その友達と私との出会いは、幼稚園の同級生としてだった。彼女はとても小さくてかわいくて、大きな目でよく泣いていた。顔を見ると、鼻にチューブを付けて、伸ばした両手は小さく指は8本だった。「あれ？」と一瞬思っただけれど、そんなことは関係なく友達になりたいと思った。私も姉も母も彼女が大好きで、いつも声をかけて一緒に笑い合う大切な友達だった。彼女がいると、先生も他の友達もみんな不思議と笑顔になる。彼女は人気者でみんなが寄ってくるのだ。彼女のお母さんが、「よく人見知りするけど、いおりちゃんたち家族のことは大好きみたい。あまり泣かないし笑っているね。」と言ってくれて私はとても嬉しくなったのを今でも覚えている。

彼女はいつも彼女の背と同じくらいの酸素ボンベを横に置いて過ごし、そのボンベを「ボンベちゃん」という愛称で呼んでいた。ボンベちゃんに当たってつまずかないように気をつけながら、いつも一緒に笑って、手も握ったし、外の芝生の上や木の家では一緒にダンゴムシをたくさん探して楽しかった。一方で、彼女が来ない日は、少し心配になった。彼女は病気があるので、風邪をひいたりすると、呼吸が苦しくなると聞いていたからだ。だから彼女が元気に来た日は、「あーよかった。」といつも安心した。

私はそんな彼女と過ごす中で何度も彼女のすごさと生きる強さを感じていた。幼稚園では、色々なお仕事をする時間があったが、彼女は何をする時も器用にやり遂げた。8本の指をととも器用に使い、はさみで小さい物を切ったり、ぬい物をしたり、パズルを合わせたり、糸をきれいにかけ

たり何でもできてすごいなといつも尊敬していた。何よりも驚いたのが、年中の時の運動会。今までは走ることを諦めていた彼女が初めて先生とボンベちゃんと走ったのだ。みんなで繋いだ紫のバトンをゆっくり、そして確実に彼女は一生懸命繋いでくれた。ゴールが最後だつてかまわなかったし、一生懸命な姿に感動して大きな声で応援した。ゴールをした彼女はとても嬉しそうで、とてもいい笑顔をしていた。一生忘れない思い出になったと思う。

2月に入ってから、カレー作りをする日がやってきた。一緒に包丁を器用に使い、作ったおいしいカレーを食べたのは今でも忘れない。彼女は「おいしい」と言って珍しくおかわりをした。帰り際に、私の母が「カレーおいしかった？」と聞いたら「うん。」と言っとうなずきとてもいい笑顔をしていた。私は彼女とハイタッチをして「また、明日ね。」と言って別れた。

カレーを食べた翌日、彼女は園に来なかった。前日から少し咳をしていたので気にはなっていたけれど、まさかあの笑顔が、そしてハイタッチをした時の彼女の手のぬくもりが全て最後になってしまふなんて思ってもいなかった。その日の夜に彼女が天使になったと聞いた。もう会えないと思うと悲しかった。

私の大切にしている宝箱には、かわいらしい色の糸かけがある。これは、彼女がお別れする数日前に私に「あげる。」といってくれた手作り品だ。あの時「せっかく作ったのいいの？」と聞いたら「いおりちゃんにもっていてほしいの。」とニコッとかわいく言った。これが彼女からの最後のギフトになった。

あれから数年経ち、私も中学生になった。努力をしてやり抜く強さ、相手の立場に立って考える思いやり、困っている人に手を差し伸べる勇氣、人を受け入れる広い心を持つこと、全て彼女と過ごした優しく美しい時間が教えてくれたと感じる。何年経っても心において思い出に心弾ませる。青い空の向こうに彼女がいてきつと笑っている。だから私も笑顔で頑張るよ。一緒に過ごした時間をずっと忘れないからね。

評 講

チューブにつながれながらも健気に生きた同級生。一緒にダンゴムシを探したこと、彼女の手先が器用な様子、リリースで最後まで走りぬいたことや一緒にカレーを作ったことなど、生前の同級生とのいくつもの思い出が一貫してポジティブに、かつ幻想的に綴られている。それだけに、カレーを作った翌日、突然お別れしなければならなかったことに強く胸を打たれる。

ツバメの命

守山市立守山北中学校 二年三組 横山 翔大

私の家には毎年ツバメがやってくる。初めはツバメが巣を作ろうとしてもお母さんがツバメを追っ払っていた。僕が「なんで追っ払うの？」と聞いたのでそれ以降は巣作りを応援することにした。ひなが巣立った後、巣を壊すこともあったが、今は巣をそのまま置いている。

今年三月に一羽のツバメが巣を陣取り始めた。「今年も始まったね」とお母さんがつぶやいた。ツバメのひながかえると玄関がフンまみれになるので大変だからだ。

親ツバメは四月に卵を五つ産んだ。卵からかえったひなにえさを与えるために親ツバメは一日に何度もえさを運んでいた。そして、五月に無事に五羽が巣立っていった。数日後、改めて巣をのぞくと卵が三つあった。二回目の産卵だった。また大変になると思いつつ、うれしくなった。

しかし、二日後、玄関に土やわらが散乱していた。親ツバメに突っ張り棒やひもを使って大きな鳥が入れないように柵を作った。もちろん、玄関にこんなものを作ったので家族も家に入るのが大変だ。宅配便も簡単には受け取れない。でも、ツバメの大家として、ひなが玄関の巣にいる間は一羽の犠牲もなく、生きてほしいと強く思った。

巣の修復が完了すると四つの卵が生まれていた。しかし、ひなになったのは三羽だった。ひなが大きくなると親ツバメがえさをやる頻度も増え、えさも大きくなった。玄関には体の半分だけ食べられたトンボがよく落ちていた。まだひなが小さいのに親が食べきれない大きなトンボをえさに与えていたのだ。同じ命なので大事に食べてくれよと思いつつながら玄関を掃除した。フンも大量になってきた。玄関を通る時、巣にいる親ツバメと目が合っても今年の親ツバメはピクリともしない。ひなを守る思いが強いと感じた。

日に日にひなは大きくなり、生まれてから二十日後には親と同じような形まで成長した。ツバメのひなの成長スピードには驚かされる。今年の夏は特に暑く、ひなも親ツバメも大変そうだった。少しでも快適になるようにと、玄関に打ち水もした。今年十三個の卵が産まれ、八羽が巣立っていった。巣立ったひなが私の家の周りをぎこちなく飛んでいるのを見ると、「大丈夫かなあ」とお母さんがつ

バメが警戒する鳴き声で鳴いているのが聞こえた。何が起こったのかと思ひ玄関の上を見ていると、巣が壊されているのが分かった。中を見てみると三つあった卵は跡形もなくなっていた。恐らく何か大きな鳥に襲われ、食べられてしまったのだ。命はあつけなく終わるということも分かった。また、食べた鳥も生きていくために必要だったのだと思ひ、自然界の厳しさを改めて思ひ知った。しばらく親ツバメは私の家に戻ってこなかった。二回目の巣立ちを楽しみにしていたが、もうダメだと思った。

五日後、玄関にまた土やわらが落ちていた。今度は親ツバメが巣を修復しようとしていたのだ。一度襲われて大変な目にあつたのもう来るはずはないと思つていた。お母さんが「ツバメの大家は外敵から守つてあげないといけね」と言つた。今度は辛い思いをしたくないので、玄関ぶやいた。自然界は厳しく、カラス、ハト、トンビなど敵だらけ。飛び立って外の世界に出たらただ無事を祈るのみなのだ。

私の家では巣作りの応援をし始めてから七年間で五十五個の卵が生まれ、四十三羽が巣立っていった。ツバメの命を見守る中で全ての命が順調に育つわけではなく、命がいかに貴重で困難に立ち向かう努力と奇跡が積み重なっているかを感じた。私も命の大切さを忘れず、どんな困難にも負けない強さをもつて生きていきたい。

空になった巣を見上げながら来年が待ち遠しい。

講評

7年間という長い期間、見守ってきたツバメの巣作り。最初はツバメを追っ払っていたが今はツバメたちを気遣う母。半分だけツバメに食べられたトンボを見て「同じ命なので大事に食べてくれよ」とトンボに対する優しい思いやり。そして、「また（今年も）大変になると思いつつ、うれしくなった」と正直な気持ちを表す作者など、一つの作文に様々な思いが凝縮されており、長年にわたる家族総出でツバメを応援する情景が鮮明に目に浮かぶ心温まる作品。

ぼくのアレルギーとかぞく

姫路市立峰相小学校 一年一組 片岡 奏詩

ぼくは、ひどいしょくもつアレルギーだった。いまは、かねつがよわいたまごだけがたべられない。アナフィラキシーで、きゅうきゅうしゃにのったこともある。おかあさんがおまもりのちゅうしゃをうってたすけてくれた。このちゅうしゃはいまもいつももっている。まいにちアレルギーのたべものをたべてめんえきをかえていくほうほうで、たべられるりょうがふえて、こむぎときゅうにゅうがだいじょうぶになった。なんどもにゅういんして、たべられるりょうをかくにんしてきた。くるしいおもいをしたことがあるから、ふやすときはこわかった。おいしゃさんとかんごしさんがいっしょにがんばってくれた。たべられるものがすくなかったときは、おかあさんはごはんをつくることやおでかけにこまったらしい。さいがいでひなんじょにいつても、くばられるごはんはほとんどたべられない。

せつかくにげても、おなががすいてよわってしまふこともあるみたいだ。だからおかあさんは、おでかけのときはかばんいっぱいにはくのとべられるものをつめこんでもちあっていた。そのひのかぞくのおべんとうも。ぼくもがんばって、おかあさんとおとうさんといもうともがんばって、たべられるものがふえた。げんきに一ねんせいになれた。いまは、おかあさんのかばんがちいさくなった。さいきん、おかあさんは

「らくになった」

とよくいう。がいしょくもふえた。おかあさんはさぼっているのかな。でも、おかあさんはぼくをずっとまもってくれた。ぼくが、いきっておとなになってぼくがぼくをまもれるようになるまではと、おかあさんはひっしだったらしい。かぞくとおいしゃさんがまもってくれたぼくのからだをだいににしないといけないなどおもう。

いのちとはなんだろう

大阪教育大学付属天王寺小学校 一年二組 村山 優日

「いのち」とはなんだろう。わからないので、お父さんにきいてみたら、「いきもののパワーそのもの」とおしえてもらった。ただし、いきものがどういったものかきめるのはむずかしいとおしえてくれた。

「いきもの」とはなんだろう。お母さん、お父さん、いもうと、どうぶつ、なつやすみにそだてたあさがお、みんないきものだ。ロボット、おもちゃ、おにんぎょうは、いきものではない。うごくものがいきもので、うごかないものがいきものではない、ということではなさそうだ。たしかに、いきものがなにかきめるのは、とてもむずかしいとおもった。

お父さんが、ウイルスというちいさなものがあって、ウイルスがいきものかどうかはきめられないとおしえてくれた。ウイルスはからだの中でうごいて、ふえていくけれど、ほんただけではふえられないからさうだ。よくわからないけれど、人げんの中をうごいてわるいことをするのだから、ウイルスはいきものだとおもった。

いきものがなにかはわからないけれど、「いのち」その

ものではない気がしてきた。ロボット、おもちゃ、おにんぎょうは、いきものではないけれど、「いのち」をかんじる。どうしてかはわかんないけど、いっしょにあそんでいると大せつにしたいいきたい気もちが生まれてくる。ずっといっしょにいたいという気もちも生まれてくる。そこに「いのち」をかんじるヒントがあるような気がした。お母さんにきいてみると、それは「あい」だよとおしえてくれた。お母さんがぼくやいもうとをあいしているように、ぼくもおもちゃやおにんぎょうをあいしているのだとおもった。ロボットもいきものではないけれど、あいが生まれるから、そこに「いのち」が生まれるのではないかとおもった。

まちがっているかもしれないけれど、「あい」ができて、なくなったらかなしいものが「いのち」だとおもった。

虫のいのち

姫路市立安室小学校 二年二組 近藤 羽夏

わたしは、虫がきらいです。ともだちの中には虫がすきな子もいるけど、にが手な子のほうが多いと思います。

わたしはおかあさんに、

「虫なんていなくていいのに。」

と言ったら、

「虫がいなかったら、人げんは生きていけないんだよ。」

と言われました。それを聞いて、

「うそだ、そんなことない。」

と言いました。

本でしらべてみると、りくの上に生きる生きものの八十パーセントはこん虫だそうです。人よりも虫のほうが多いなんてびっくりしました。虫は花ふんをはこんでくれるので、やさいやくだものやはちみつを人げんが食べられること、きれいな花がさくのも虫のおかげということを知りました。

鳥や魚は虫を食べて生きていて、鳥や魚を食べて生きていっているどうぶつや人げんがいます。虫がいなくなると鳥や魚の食べものがへってしまい、わたしの大好きな魚も食べられなくなってしまうかもしれません。

ほかにも虫はしんだどうぶつやかれたしよくぶつを、え

うがドキドキして息が止まってしまいそうになるからです。泣いてもドキドキしてしまうから、お母さんがずっとだっこしてくれました。大変だったと言っていました。ぼくのチューブを見た人が、心ばいしてくれて、お母さんはうれしかったけどかなしかったと言っていました。できない事がたくさんあって、かわいそうだしくやしかったと言っていました。お父さんは、神様におねがいしに行ってくださいました。

八キログラムになれたので、すごい手じゅつをして、大せいこうしました。ぼくの心ぞうは泣いても大丈夫になりました。家族のみんながいっぱいだっことができるようになりました。ぼくも、いろいろな事ができるようになりました。マラソンはたくさんできないけど、学校で友だちとあそんだり、勉強したり、とても楽しいです。いつも病いんで見てもらって、けんこうでいられるのもうれいしいです。

そういえば、ほいくしよの時に、お姉ちゃんがぼくのことを作文に書いてくれて、しょうをもらいました。ぼくじやなくてお母さんが泣いていました。家族のみんなと、病いんの先生がたと、血をわけてくれた人と、手じゅつやけんさに使うきかいを作ってくれたみなさん、どうもありがとうございました。ぼくはとても元気です。

いようにかえるしごともしているので、虫がいなとききれいな空気や水もなくなることがわかりました。

きれいな虫だけど、いろいろなしごとをしていて、いることが分かり、虫がいなくなると人げんやどうぶつは、こまってしまうこともわかりました。虫のいのちも大切にしようと思いました。

ぼくのこと

東大阪市立孔舎衛東小学校 三年一組 生田 大悟

ぼくのむねには、大きなきずが五つあります。ファロー四ちようしょうという心ぞうの病気があるからです。それで、一才の時に、手じゅつをしました。手じゅつができる体重になるまで、お母さんは一生けん命母にゆうをのませてくださいました。ちよつとずつ何回ものんだり、鼻にチューブを入れてのんでいました。理由は、少しのむだけで心ぞ

正宗の命

姫路市立旭陽小学校 三年一組 鵜飼 一有

「正宗おはよう」

庭にあるメダカ鉢の中を泳ぐ20匹程のメダカの中から正宗を見つけ、あいさつをしてからエサをやるのがぼくの朝の仕事でした。正宗は片目のメダカです。最初に見つけた時、「片目で大丈夫かな。」と心配になり、毎日元気が確かめるのがぼくの日課となりました。ぼくの心配をよそに正宗はよく食べ、元気に泳ぎ大きくなりました。無事に冬を越し、ぼくの朝の日課も一年をすぎました。

ある朝、いつものように正宗をさがすけれど見つかりません。お母さんと呼んで一緒にさがしても見つかりません。「どこに行ったのだろう」と不安になったぼくの目に入ったのは足元にいるアリの集団、囲まれているのはメダカ。おそろおそろアリをはらうとそこには正宗がいました。前日に鉢の水を増やしたので、そのせいでジャンプした時に外へ出てしまったのだと思います。「怖かったね」「苦しかったね」頭の中で色々な言葉がうかぶけれど声に出せないまま正宗をひろいあげお墓を作りました。

次の朝、メダカ鉢に正宗はいません。「ごめんね。」の気

持ちでいっぱいになります。その次の朝もやっぱり正宗はいません。「怖かったね。」の気持ちに心がひろがります。でも、その次の朝、元気に泳ぐメダカを見ると「なんで正宗だったんだろう。ちがうメダカだったらよかったのに。」という気持ちが浮かんできました。自分勝手だけれど、その考えが頭からはなれなくなっていました。

この気持ちの正体は何なんだろう。考えてみると、悲しみの深さなのかなと思いました。命の大切さはみんな同じだけれど、自分にとって特別な命を失った時、悲しみの深さがちがうのだろうと思います。その悲しみの深さがぼくに「ちがうメダカだったら」と思わせてしまったのだと思います。どの命も大切で自分の特別なもののために身代わりになってよい命はないのだと今はわかります。

庭にあるメダカ鉢の中を今日も元気にメダカが泳いでいます。

「色々ごめんね。」
メダカに声をかけると、ちょっと気分が晴れました。

ぼくに「じいじ、まだあたたかいよ。さわってあげて。」と言ってくれたのでぼくはそおっとじいじの手をにぎってみるとぼかぼかしたじいじのぬくもりがぼくの手に伝わってきました。でもじいじはもういつものようにぼくの手をにぎり返してはくれません。ぼくはますます何が起きたのかわからなくなっていました。

かんごしさんがじいじの体をきれいにふいてくれている時、ぼくもせ中をふかせてもらいました。ぬくもりはもう感じられませんが。その時はじめてぼくはじいじの死をうけ入れることができました。そしてやせて小さくなってしまったじいじのせ中を見て、じいじはさい後までがんばって生きたんだなあと思うとなみだがこぼれてきました。

ぼくは今生まれはじめて人の死を身近に体けんしました。死んでしまうということがどういことなのか、ぼくにはまだよくわかりません。でも心をこめてふいたじいじのせ中をぼくはずっとわすれないと思います。

ぼくも一生けんめいがんばるよ。おうえんしていてね。じいじ、ありがとう。

じいじのせ中

私立智辯学園和歌山小学校 三年一組 津村 悠登

夏休みが終わるころ、大すきだったじいじがなくなりました。

じいじはぼくが生まれてすぐのころに病気がわかったそうで、ぼくの記おくにあるじいじは少し苦しうだけどもえ顔で糸まき車やむかしの遊びをたくさん教えてくれるやさしいじいじです。そんなじいじが大すきでぼくはよく会いに行きました。

その日もいつものようにじいじに会いに行った帰り道、とつぜんお母さんの電話が鳴りました。急に泣き出すお母さんを見て、ぼくは一体何が起きたのか全くわかりませんでした。そのまますぐにひき返してじいじのところへかけつけると、ついさっきまで苦しうに息をしていたじいじはもう動かなくなっていてまるでしずかにねむっているかのようにです。じいじの手をにぎって泣いているお母さんが

じいちゃんとひまわり

太子町立太田小学校 四年三組 猶原 未結

「じいちゃんが、たおれた。」

とつぜん、お母さんから言われて私はおどろいた。夏休みに入っつてすぐ、近所に住んでいる、じいちゃんが入院した。胃がんだった。ばあちゃんは病院へ行って家を留守にする事が多くなった。こうがんざい治りようをしている、じいちゃんを見て私は心配になった。

八月のおぼんに、じいちゃんの家に行った。すると、じいちゃんの家で元気にさいていたひまわりが、下を向いていた。それに葉っぱも黄色くなって、今にもたおれそうになっていた。

「じいちゃんが入院してから、いそがしくて水をあげていなかったから。」

と、ばあちゃんが悲しそうに言った。私は、あわてて水をあげた。じいちゃんの家には、いつも季節の花がいっぱいさいていた。私はその花を見るのがとても好きで楽しみにしていた。元気がないひまわりを見た時、じいちゃんが病院のベッドでねているすがすがが目にかんできた。

「もう一度、元気になってほしい。」

そんな思いで私は次の日から毎日、水やりをしに行った。それに、ひ料もあげた。するとひまわりは少しずつ元気になるっていった。ひまわりにとって、ひ料と水は命をつなげるために欠かせないものなんだと思った。じいちゃんも葉がきいて、少しずつ元気になっていった。

命のかたちはちがっていても人間と同じように花も生きているんだなと思った。命は動物や虫、花や木にもある。人間以外の生きものや植物も命があつて、その大切さはみんな平等なんだと思った。

もうすぐ、じいちゃんが退院する。元気にさくひまわりを見てよるこんでもらえるように、私の水やりはつづく。太陽に向かって真っすぐにのびたひまわりは、大きな花をさかせて、うれしそうに笑っているように見えた。

「が加わっております。感謝の心でいただきますしよう。」
 と言ってから食べるからです。いただきますとは感謝することだと思っていました。

でも正直、毎日のことになると、物心がついたときから言っているフレーズで食事の時の決まり事だから言っているだけでした。でも、お父さんに言われて、少し意識してみることになりました。

今日のハンバーグの材料は牛肉と豚肉のミンチ、玉ねぎでした。玉ねぎは植物ですが、植物も生き物です。牛肉はもちろん牛の肉です。牛の寿命はだいたい十五年くらいらしいですが二年程で解体され牛肉にされるそうです。かわいそうな気もしますが、人間が生きていくためには食事をしなければならぬし、動物や植物の命をいただかなければなりません。その命に感謝の心を持たないといけないと思いました。そして、我が家の食卓に並ぶ前に、野菜や牛を育てている生産者さんがいて、加工して販売している人がいて、私たちが食べるものを買うために働いてくれるお父さんがいて、料理してくれるお母さんがいて、初めて私の食べるハンバーグとなって食卓に並ぶことにも感謝しないとだめだと思いました。そう考えると、私が生きるということは全てのことにつながっていて、そして毎日生

感謝の「いただきます」

私立智辯学園和歌山小学校 五年一組 有田 結衣香

ある日の夕方、
 「今日のご飯何にする？」

「ハンバーグ！」

弟が元気に答えました。お母さんがハンバーグを料理してくれて、

「いただきます。」

と言ってから夕食を食べ始めました。食事が始まってしばらくして、お父さんが、

「いただきますってどういう気持ちで言っているの？」

と突然聞いてきました。私は、

「別に。気持ちとか特にないし。」

と答えました。本当は、少しは意味を知っていました。なぜかというと、私の学校では、昼ご飯の前に「一滴の水にも天地の恵みがこもっております。一粒の米にも万人の力

きているだけで感謝することがたくさんあるのだと気がつきました。

「いただきます」は何気なく使っているフレーズですが、生き物の命をいただいていることを忘れないでおこうと思えました。また、いのちというのは、色々な人とのつながりがあつて成り立つことだということも忘れないでおこうと思えました。

今年も出てきてくれてありがとう

京都教育大学付属京都小中学校 五年B組 古株 陽茉莉

「朝からうるさいなあ。」

今年もセミが大音量で合唱中だ。夏休みになり、少し朝寝坊もできるかと思っていたけれど、毎朝母に起こされる声よりもはるかに大きくて、結局いつもより早起きすることになってしまふ。

しかし、実は、この光景にはほっとしている私がいる。

今の家に引越してきて、今年の夏で三回目だ。以前住んでいた家の前には公園があり、夏になると地面が穴だらけになるほどセミがたくさん羽化する。二年生の夏に、セミ

の羽化を見守り、観察することが出来、それを夏休みの自由研究にした。セミは、十年程土の中で過ごし、地上に出て来て十日程で命が終わってしまうと知った。十年というと私が生まれて今までの期間と同じだ。私はこの十年の間に様々な所へ連れていってもらったり、たくさん体験や経験をしてきた。幼稚園や小学校にも通い、大切な友だちもたくさんできた。今は、大好きな水泳も毎日出来ている。すごく充実した楽しい毎日を通してしている。

新しい家を建てる時に、両親が私の大好きな水泳が思うぞん分できるような庭に大きなプールを置くために、土をうめてタイルをしきつめてくれることになった。工事中に何度も家を見に行ったが、その時に、セミのぬけがらをいくつも見つけた。ここからもたくさんセミが羽化するんだとうれしくなった。と同時に、この場所をタイルにしてしまつたら、これから生まれてくるセミたちは、どうやって外に出てくるんだろうと一気に心配になってしまった。やっと地上に出られる!!と思うと地上に向かって進んでい

おそう式の日、僕は、おそう式は泣く人は泣き、悲しみを共有し、お別れをする場所だと思っていた。だけど、おそう式が始まるまでの時間は笑っている人もいて、とてもおどろいた。おそう式の最後に、おじいちゃんが、喪主のあいさつをした時も、会場全体が笑いに包まれておどろいた。

焼かれて骨になったときは、少し独特な臭いがして、気持ち悪かった。火そう場の人がどの仏の名前の由来を教えてください。のどの骨が仏様が手を合わせているように見えることから、のど仏という名前がついたそう。本当にそう見えるから、説得力があった。

ひいおばあちゃんは、座ろうとした時に、ピアノの角に脇腹をぶつけて肋骨が折れたらしい。その後からは、家のベッドでほとんど寝て過ごし、少しずつ食欲がなくなり、飲みこむことができなくなると、点滴を始めた。点滴をする、痰がたくさん出て、それがとても苦しうにしていたので、一週間くらいで、家族と本人の意思で、点滴をやめた。それから三日目くらいに息を引きとってしまった。ひいおばあちゃんは、死に近づくことを覚悟し、点滴をやめたのだろうか。一緒に暮らしていたおばあちゃんによる、とてもおだやかに死んでいったらしい。苦しみも痛み

ると頭の上がかたい!!出られない!!となった時のセミの気持ちを想像すると心が痛くなって、新しい家へのワクワク感が減ってしまった。

私は両親に相談し、片隅に花だんスペースを残してもらった。私の心は少し軽くなった。

今年の夏もその花だんの中は穴がたくさんあいていて、花だんの植物にセミのぬけがらががついている。元気な鳴き声を聞いて、私はセミのように、今日も元気いっぱい今を生きようと思う。

ひいおばあちゃんの死

小野市立河合小学校 六年一組 時宗 八朗太

一ヶ月前、ひいおばあちゃんが死んだ。百六歳だった。息を引きとったと聞いた時はとても悲しかった。泣きはしなかったけれど、悲しかった。妹は大泣きしていた。

もなく、静かに寝ていると思ったら息をしていなかった感じだったそう。これももし、折れたのが足だったら、そのまま入院だったらしく、肋骨だったから家に帰れた。病院のベッドより家のほうがもちろんいいから、最後まで家で過ごせたということがとても幸せなことだと思った。

初めて身近な人が亡くなって、僕は悲しかったけれど、泣かなかった。一日もすると元通りの生活になって、人が死んでしまうってこんなことなんだなと思った。ひいおばあちゃんはもう百六歳で、生きているのがすぐくて、死ぬ覚悟が頭の中でできていたからだと思う。

人はいつか絶対死ぬ。未練なく、やりたいことを全部やり切って、生ききってから死ぬという死に方をしたいと思った。ひいおばあちゃんの死を経験して、僕はそう思った。

命の選択

私立滝川第二中学校 一年三組 占部 由大

「命って平等だと思う？」とお母さんに聞かれた。僕は「平等だと思う。」とすぐに答えた。するとお母さんは「平

等であるべきだよ。でも大災害が起きたときはどうだろう？コロナの時はどうだった？」と聞いてきたのもう一度よく考えてみた。

僕は医療系のドラマが好きでよく見るけれど、トリアージをする場面をよく見る。トリアージとは、災害発生時などで多くの傷病者が出た場合に、緊急度や重症度に応じて優先順位をつけて患者を色分けすることだ。お医者さんが一人当たり約三十秒でおこなうらしい。黒タグは救命の見込みがないことを意味する。お母さんはこれを「命の選択」と言った。こんなプレッシャーのある仕事をしている人たちはすごいと思う。僕だったら、優先順位が本当に合っているのか一人では怖くて決められない。僕の選択で人の命が左右されると思うと不安で仕方がない。それをたった三十秒でしなければいけないお医者さんのストレスは想像以上に大きいと思う。

世界中でコロナが流行って数え切れないほどの死者が出た。その時も「命の選択」が行われていた。ベッドや人工

僕は、今回のことを教訓にして、現場のお医者さんではなく、海外のように基準を作るべきだと思う。その方がお医者さんのストレスが減るからだ。それに、基準があれば不公平が減って命が平等になると思うからだ。でも一番は大災害や大事故や戦争など「命の選択」をしなければいけない不幸な出来事が起こらないことだ。全てを防げるわけではないけれど、起こさない努力をしなければいけないと思った。

つながれる植物の生命

京都市立上京中学校 一年五組 岡田 結衣

今年のお盆、和歌山に帰省していた時、テレビから台風7号の接近に関するニュースが流れた。「『巨大地震注意』が発表されている中で、今度は台風か…。」今回の台風は関東地方に接近とのことだが、私は、相次ぐ自然災害に心が傷んだ。同時に昨年のお盆の出来事を思い出さずにはいられなかった。

昨年のお盆、

「このままだと、今晚直撃しそやな。畑見に行くからいい

呼吸器の数に限界があったからだ。最初は先着順だったけれど、ベッドがなくなってくると重症度や年齢も考えて選択しなければいけなくなってきた。この時も決めるのは現場のお医者さんだった。自分も感染するかもしれない恐怖もあるのに、そんな責任まで負わなくてはいけないのは本当に大変だと思うし尊敬する。

病院に百歳と二十歳の重傷者が同時に運ばれて来たとする。どちらかを選べと言われたら僕は将来のある二十歳を選ぶと思う。でも、それが自分のおじいちゃんだったとしても同じ答えを出せるか悩んでしまう。六十歳だったらどうだろう？自分では決められない。でも若い人に優先的にまわすべきなのかもしれないと思った。

実際に外国ではお年寄りよりも若い人が優先されていたそう。入院中の高齢者が自ら自分のベッドを若い人に譲ったニュースを見たこともある。自分の命よりも若い人の命を助けようとする勇気がすごいと思った。僕なら死ぬのが怖くて譲れないと思う。

しよに来てくれる？」

と祖母が私と兄に言った。台風が近畿地方を直撃するということ、祖母は台風の進路予想をこまめにチェックしていた。祖母の家は和歌山県の新堂というところにあり、みかん作りをしている。私たちはレインコートを着て畑に向かった。今にも雨が降り出しそうだった。畑に着くと祖母は

「コンテナとかプランターとか、風でとばされそうなものを全部倉庫に運んでくれる？」といった。私は兄といっしょに荷車にプランターやコンテナをのせて倉庫の中に移動させた。そして、他にも危険なところがないか、畑を見まわった。祖母といっしょにみかんの枝をかき分けながら、どんな畑の奥まで入っていった。背の高い木、幹がとても太い木はまだ小さい木、様々な木があった。その中に、添え木を立てている、みかんの木を見つけた。

「この木はなんで添え木してるん？」

と、祖母に聞くと、

「この木は、前回の台風で倒れてしまって根がむき出しになってしまったから、もう一度植え直して添え木をしたんだよ。こうやって台風が来るたびに、おじいちゃんといっしょに畑に来て危険なところはないかと思ったり、台風が

去った後にもまた畑に来て、倒れた木を元に戻したり、畑をきれいにしたりしたんやで。」

と教えてくれた。三年前に祖父が病気で亡くなってからは、祖母が親せきに助けてもらいながら畑を守っている。

もう少し奥まで進んだところに夏なのに黄色い葉をつけた大きな大きなみかんの木を見つけた。祖父の祖父、つまり私のひいひいおじいちゃんが植えた木だそう。木の寿命が近づき始め、葉が枯れてきているとのことだ。

「今までたくさんの美味しいみかんを作ってくれてありがとう。感謝、感謝。」

と言う祖母の声は少し淋しそうな声だった。

長い長い年月、いくつもの自然災害を乗り越え、現在まで美味しいみかんを作り続けてくれたこの大きなみかんの木は最後の時を目の前に堂々と立派に私たちの前に立っているように見えた。その勇敢な姿は、病気になっても最後まで美味しいみかん作りについて考え、命を燃やし続けた祖父の姿と重なって見えた。私はそっと木に触れて

「台風が来るけど、気をつけてね。」と伝えた。

先祖代々、伝わってきたうちのみかんの木。祖母が木に話かけていたように、ご先祖様たちはみんなこうして、木に話かけながら大事に世話をし、生命を繋いで来たのかもしれない。今の私には何が出るかわからない。しかし、この生命を守り繋いで行くことが出たらしいなと思う。

ご先祖様の想いに触れることができた私にとって昨年は特別なお盆であった。

いのちのスープ

兵庫県立大学附属中学校 一年二組 奥田 絢斗

僕にとつての「いのち」と言えば、ある一つの体験が思い出されます。

それは、四年生の夏休みに、無人島で一週間自給自足で生活するというイベントに参加した時の事です。その年の無人島は、毎日雨が降り続き、魚などの食料が全く捕れず、米を炊くにも焚き木が湿って、全く火がつかない、自分にとってまさに地獄のような状況でした。毎日、食べ物事ばかり考え、空きっ腹を抱えて、ひたすら火起こしをしていました。そんな中、「命の話し合い」として連れてきた鶏を殺して食べるかどうかみんなで話し合っただけで決める事になりました。とにかくみんなおなかを空けて力も出ず、善悪を考える余裕も無く、当然の事のように、殺して食べる事に決まりました。

しかし、実際殺す段階になって、誰が直接手を下すか中々決まらず、僕が立候補しました。鶏を殺す事に対して、1%の好奇心と九十九%の罪悪感で僕の心は複雑に入り混じって、鶏の首を切るナタを持つ手の震えが止まりませんでした。当時の僕は力がとても弱く、首を完全に切断するのにかなり時間がかかり、鶏は苦しんでいるように見えました。が、心を無にしてなんとか最後までやり遂げました。

その後、みんなで羽をむしったり身や骨を切り分けたり沢山の湯で煮たりと沢山の作業をこなし、ようやく鶏のスープが完成した時には、とっくに日が暮れ、辺りはすず

に真っ暗になっていました。無人島に来てから毎食しょうゆと砂の入ったこげたご飯で食いつないできたので、その鶏のスープの味は本当に涙が出るほど美味しく生きて返ったように感じました。疲れきった体の隅々まで染み渡り、力が湧いてきて、生きていてよかったと実感するようになり、まさに僕の命を救ってくれた「いのちのスープ」でした。この体験を通して、僕は、人間は他の命を犠牲にしなければ生きていけない事、つまり人間は他の沢山の命によって生かされている事を身をもって実感しました。鶏を殺すのはいけないことだとか、命を奪うのは可哀想だとか、きれいとばかりでは生きていけないのです。だからこそ、犠牲になってくれる沢山の命に感謝し、必要な分だけありがたく頂き、粗末にしないよう心掛け、また、僕自身の命も大切に生きていきたいと思えます。

今でも、ふとした時にあの時の苦悶に満ちた鶏の顔を思い出します。今の僕なら、あの時よりも早くあまり苦しませずにあの世に送ってあげられたでしょう。複雑な気持ちもありますが、貴重な体験としていつまでも心に留めておきたいです。

そして今日も僕は大好物のフライドチキンを骨の髄までしゃぶって軟骨までありがたく頂きます。

「いのち」について

神戸市立岩岡中学校 一年二組 デーヴィス 恵莉

「大きくなったなあ」と母が言った。最近私が朝起きてくるたびにそう言う。今年の春から夏にかけて私が母の背をこしたからだ。先日私が「いのち」の作文を書こうか悩んでいると、母は「いのちとは時間と考えるようになった」と話した。そして「あなたがこんなに大きくなるまで元気に生きられているのが感謝だ」と続けた。

私が小学三年生の時、母にがんが見つかった。私の父がイギリス人なので、両親は英語で会話することが多く、英語が分からない私は聞き流すことが多いが、その日は、私の耳に「ステージ」という言葉が入ってきた。前日がんのステージ四で亡くなった芸能人のニュースを見たからだ。私は思わず、「マミーはがんなの？」と聞いていた。両親は驚いたが、否定せずにゆっくりと状況を説明して、私を安心させようとしてくれた。それでも、私は胸がしめつけ

られるような苦しさを感じて泣いてしまった。

その後、母はステージ三のがんの手術と半年間再発予防のための抗がん剤治療を受けた。私は祖父母の家から学校に通わせてもらい、母もそこで療養し無事治療は終わったと思われた。母が言うには、その時はコロナ禍にもかかわらず、あつという間に治療が進んだので感謝はたくさんしたが、いのちについて深く考えることはなかったらしい。

私が小学五年生の冬、残念ながら再発転移がわかった。治ったと思っていたので、家族が受けたショックは大きかったが、すぐに化学療法に加えて、母は色々調べて温熱療法や食事療法も取り入れた。腫瘍マーカーは上下するが、今もとても元気に過ごしている。ただ、この一年半、たくさんさんの感情に揺れ動き、私の成長、例えば卒業式や入学式を見ることのできるのか、と考えていたらしい。そこで、自分の背を抜かすほどに成長した私の姿を見るのが感慨深いのだと思う。だから、いのちは愛する人と一緒に過ごせる限りある時間だと思うみたいだ。この夏を振り返ると、

私もそれを実感する。

私には、七才上の兄がいるが、十五才で上京し今は海外で働いているため、普段は一緒に過ごせないが、この夏は四年ぶりに三週間ほど一緒に過ごせた。プロ野球観戦に連れて行ってくれたり、親戚と旅行したりして、大好きな兄と最高の思い出を作ることができた。祖父母も両親も、親戚も一緒に過ごせて貴重な時間だった。

私は、これまでニュースで報道される事故や病気を他人事のように思ってきた。大切な人を失うかもしれないことが自分事となって、やっと少し苦しさがあった。元気な人でも事故や急病でいつ命を失うか分からない。だから、人を傷つけるような発言や行動を許せない。そして愛する人と一緒にいる時間を大切にし、それに対する感謝の気持ちも忘れず、限りある時間、いのちを終える時に悔いのないような生き方をしていきたいと思った。

ピイピイ、長生きしてね

神戸市立大沢中学校 一年 福井 近良

僕は犬を飼っています。名前はピイピイ、オスの黒柴で

す。僕は覚えていませんが、名前は、僕がつけたそうです。ペットショップで買ったピイピイをむかえに行った時に子犬を見た2才の僕が「ピイピイ」と呼んで、その時からピイピイになりました。

両親は最初、ピイピイを飼うつもりは無かったそうです。ペットショップの店員さんに「この子は、何ヶ月ですか？」と聞いたら「5ヶ月です。大きくなってしまったので来月には、もう、」と言われ、来月にはどうなってしまうのだろうと心配になり引き取る事に決めたそうです。そんなピイピイも、もう11才です。人間で言うところの60才、おじいちゃんです。ピイピイは昔から人をおかみません。小さい子供に飛びついたりほえたりしません。よその犬がほえかかってきても困った顔になるだけでけんかしません。なでられたりさわられたりしてもじっとしています。僕の友達がピイピイをさわったりしても怒りません。気の良い犬です。朝と夕方に父か僕が散歩に行きます。毎日一丁目を歩くので僕が知らない人でもピイピイは知り合いという事があります。ちなみに、真田さんと井上さんとも友達です。そんなおだやかなピイピイも一つだけ怒る事があります。お気に入りのおふわふわした布をとられることです。毛布などはくわえて離しません。ピイピイはふわふわが大好きです。

今年の春ごろ、パイパイがご飯を食べなくなり、いつもペロツと食べていたドックフードをほとんど食べず残す事が続きました。お母さんが手で一つぶずつあげたりお湯でふやかしたり、ふりかけをかけたたり色々な事をしましたがなかなか食べてくれませんでした。僕は「もしかしてパイパイは病気かな」と思いました。その後、夜にせきをするようになりました。大きな音でせきをするので家族みんな心配しました。パソコンで調べたら心臓病や肺炎の事ができました。

咳が続くので父がパイパイを動物病院に連れて行きました。パイパイは動物病院がきらいです。行くと注射をされるからです。でもかしい犬なのでおとなしく行きました。父はじゅう医さんにパイパイの様子を話しました。ごはんを食べない事、少しやせた感じがする事、せきをするようになった事などです。じゅう医さんはパイパイに体重測定、検尿、検便、体温測定、ワクチン、採血をし最後に聴診器で肺の音を聞きました。そして「パイパイちゃんは

ぼっちゃりして元気です。」と言いました。

帰宅した父からその話を聞いて家族みんなびっくりしました。思っていたのと反対だったからです。僕も「まじか」と思いました。でも元気で良かったです。

あんなにせきをしていたのに、病院に行った後はなぜか全くしなくなりました。ご飯も残さなくなりました。なぜ薬なども飲んでないのに良くなったのだろうと思いましたが。父に聞くと「病院に行くのがいやすぎるから病気がよくするのやめたんやろ。」と言いました。僕は「そんな事あるかな?」と思いましたが、パイパイが元気で良かったです。

僕は十三才パイパイは十一才で二才差です。でもパイパイは犬なので、人より早く年をとってしまいます。最近ではおじいパイと呼んでいます。人よりも早く過ぎてしまいうパイパイの時間が幸せで楽しい時間にできるようにこれからもちゃんとパイパイの事を大切にしておじいパイがつまでも元気でいれるようにしたいです。

巡る命

大津市立仰木中学校 二年五組 池野 椋音

私は、双子で産まれました。私が姉で、二分後に弟が産まれました。父方、母方、どちらの家系にも双子はおらず、母は双子を妊娠していると分かった時、本当に驚いたと言っていました。このように突然の双子誕生だと思われていましたが、その裏には私たちが双子で産まれるべくして誕生した理由がありました。これは、私たち双子と母の実体験です。「いのち」というテーマについて考えるにあたり、この体験が真っ先に頭に浮かびました。

私と弟が二歳頃のこと。ある日、家で私たち双子と母の三人で遊んでいた時でした。弟が突然、「のんちゃん(私)は、一回ママのお腹に先に入っていたけれど、出るのが早過ぎて上手に出られなかったなあ。だから、もう一回お空に戻ってきたやん。」と、話し始めたそうです。すると、それを黙って聞いていた私も、「うん。そうやった。ママのお腹から出るの、失敗してん。だから、次はゆいくん(弟)がママのお腹に入りに行く番やっただけど、のんちゃん(私)待つのが我慢できないから、ゆいくん(弟)と一緒にママのお腹に入りに行くようになってお空の上で相談して、二

人で一緒に入ることにしてんな。」と答えたそうです。それを聞いていた母は、全身に鳥肌が立ったそうです。なぜなら母は、私たち双子を妊娠する一年半近く前に一度妊娠したものの、残念ながらすぐに流産してしまったそうです。そのような過去を、私たちに伝えてはいなかったのです。さらに驚くことに、最初の子を流産した日が、私たち双子の出産予定日だったそうです。母の中で双子の出産予定日を知らされた時には、あまりの偶然に込み上げるものがあったそうですが、私たち双子が揃って胎内記憶を突如話し出したことにより、信憑性が増し、双子を授かった意味に気付いたようです。同時にその時初めて、流産という深い悲しみから、本当の意味で立ち直ることができたそうです。胎内記憶は年齢と共に薄れていくと言われているように、私や弟のそれも薄れていきました。しかし、母の記憶の中にはその時の一言一句がしっかりと刻まれており、今日の日まで幾度となく母から、その時の感動と共に伝え聞いています。

近年、簡単に命を絶つ、人を殺めるなど、命を軽視するニュースが後を絶ちません。ありきたりな言葉になります。一人ひとりがかけがえのない命です。その命の誕生までは、感動的なドラマがあります。胎内記憶を通して、

私は自身の命の大切さ、素晴らしさを日々、実感しています。自分の胎内記憶に触れられる人は、ほんの一握りかと思いますが、一人ひとりが自身の誕生の裏側に想いを馳せることで、命の大切さの再認識につながるのではないかと考えました。私が確信を持って言えること。それは、「命は巡っている」ということです。ただ、命を軽視したり、粗末にしたりすることによって、命の循環を止めてしまうのではないのでしょうか。大切な命を守るには、社会の制度や政治・法律などではなく、一人ひとりが自分自身のことを大切にできるかどうかという、心の根っこの部分だと強く感じました。

母が元気になったら聞きたい質問

草津市立高穂中学校 二年一組 伊藤 伸

二〇二四年八月三十一時二十六分、僕の祖母は亡く

日必ず祖母の遺影の前で泣くようになった。祖母の死を受け入れられない母の心はとても重症だと思う。

僕はそんな母の様子を見て、いのちについて考えるようになった。いのちとは何かということを考えれば考える程むずかしく、答えがみつからなかった。しかし、いのちというものの特徴だけは少しずつわかってきた。

僕は、いのちは一つ一つが別々あるのではなく、触れ合うことで他のいのちとくっついて、どんどん大きないのちになると考えた。周りの人に尽くしていた祖母のいのちは、とてつもなく大きくなっていったのだろう。そんな祖母という大きくて偉大な存在を失った母は、心の状態が今とても不安定だと僕は考えた。母は強い人だから、そう簡単に心に穴が空くことはないので、母にとって祖母の死はとても辛いことだと改めて分かった。

そう感じてから、僕は母にマッサージをよくするようになった。母の悲しみとコリを一緒にとりたいたからだ。母の心に祖母の死で空いた穴は、そう簡単にうめられないと思う。もし心に空いた穴が簡単にうめることができるなら、そもそも心に穴が空かない。しかし、母の力になりたくて続けている。そして母の心の穴がうまって元気になったら、いのちについての答えを聞こうと思う。とてつもなく辛い

なった。

連絡を受けて、急いで車で病院に向かい駆け込んだ病室には、チューブを何本もつないで髪を半分剃られ、酸素マスクをして横たわっている祖母がいた。母が最初に大声で泣きながらベッドに横たわっている祖母の横に行った。まだ祖母の体は温かったが、すでに亡くなっていた。医師の死亡宣告を聞いて家族みんなが大声で泣いた。いたたまれず病室を出る人、一人で立てないほど後ろに倒れこんで泣く人もいた。母は祖母の死を受け入れられず、ひたすら祖母に声をかけつづけていた。

僕の祖母は、とても優しく、料理上手で自分の身の心配を気にせずに、周りの人に尽くしていた元気な人だった。周りの人から尊敬され、信頼され、とても愛されていた。

そんな優しい祖母が亡くなってからというもの、母は元気がなくなり、あまり笑わなくなった。前までは、僕がその日の出来事を母に話すと、感想を言ったり、笑ったり、ほめてくれたが何を話しても反応がなくなった。母は、毎

祖母の死を乗り越えた母なら、その答えを持っているような気がする。

語り継ぐ命

京都市立二条中学校 二年一組 樫尾 宗之介

「八月六日」今年も広島で平和記念式典が開催されているニュースが流れた。

僕のひいおじいさんは一九四五年八月六日八時十五分、広島で原子爆弾を受けた。二十二才の時だ。当時は学徒出陣中で、その日は今も残る原爆ドームの横のビルで作業をしている時だった。強烈な光とともに爆風で地下へ落ちた。これが不幸中の幸いだったようで、数時間地下で意識を失っていた。この後の話は語りべさんが語る話や、原爆資料館に残っている記録とおなじで、焼け野原の中を走り、数日は死体の処理などを手伝ったそうだ。

ただ今となってはひいおじいさんが原爆を受けたことも、原爆を受けて生存してきたことも一切記録になく、国への登録もしていない。僕がこの話をしっかり聞いたのも最近で、母や祖母から少しずつ聞いている状態だ。なぜこ

の話をひいおじいさんはしなかったのか、一番の理由は「恥じているから」だ。当時被爆をした人から悪い何かが感染するという根拠もないウワサがあったり、あの日を思い出して語るなど、あまりに悲惨な状況を思い出すのも辛かったからだ。祖母からも広島親戚ほとんどが原爆のことを話すのは嫌がっていたと聞いた。母からは母が小学生の時、僕と同じように話を聞かせてほしいとお願した時に一度断わられたと聞いた。それでも孫のために少しづつ話をしていく姿に、ひいおばあさんが驚いていたらしい。そのぐらひいおじいさんが受けた傷は大きかったのだ。僕は直接ひいおじいさんから話は聞けなかったけど、何年も抱えてきた苦しみはみんなの話を聞いて少しわかった。でも本当に少しだけだ。

ひいおじいさんが亡くなってから、家族で広島へお墓参りに行った。その時に原爆ドームや資料館などを見てまわり、原爆の恐ろしさや悲惨さを目の当たりにした。聞いていた話より数百倍恐ろしく感じた。原爆ドームの横のビル

命をいただくということ

彦根市立中央中学校 三年一組 浅野 はな

今朝、朝ごはんにゆでたまごを食べた。昨日の夕飯には、豚肉のしゃぶしゃぶ。私たちは動物の命をいただいて暮らしている。私たちのもとにやってくる動物たちは、「お肉」という存在になるまで、どんな風に暮らしているのか。新聞記事を読み、驚いた。例えば豚。母豚は種つけから赤ちゃんが生まれるまでの約百十四日間、「妊娠ストール」と呼ばれるスペースで過ごす。「妊娠ストール」は豚一頭がぎりぎり入るぐらいのスペースに柵を使って区切ることで作られている。そんな狭い空間で体の向きを変えることもできないまま、子どもが生まれるまで待つストレスに、私だったら耐えられないだろう。そして、そんな風に育てられた豚を私は食べているということを考えて、これまで食べてきた豚たちに申し訳ない気持ちがかみ上がってきた。

ではなぜ、妊娠ストールで育てなければならないのだろうか。コストをおさえるためという理由が挙げられる。平飼いにすることで母豚が子豚を踏みつぶさないように管理する必要があるため、人件費がかかるのだ。

にいて生存しているなんて奇跡に近い話だった。死体の処理なんて話を聞くのと、写真や映像を見るのでは大ちがいで、僕は言葉にならなかった。言葉にならない状況をひいおじいさんは実際に経験してしまっていたのだ。

「命は重い。」でも簡単に奪われてしまう軽い物になっていた。命を軽く考える世界をなくしたい。広島原爆から考える今必要なことは何だろうと考えた時、僕は核兵器の根絶、命の重さについて世界中の人々で同じ気持ちになることだと考えた。軽い命なんてこの世には存在してはいけない。世界の平和を願うとともに、世界中の人がもう一度命について考えてほしいと思った。ぼくはひいおじいさんの話をしたいと思う。

豚と同じように、鶏もケージに入れて育てる「バタリーケージ」という飼いやから「平飼い」と呼ばれる鶏が自由に動ける飼いやになると、人件費がかかり十個入り二百円程度の卵が二倍以上の価格になる。一般的な消費者からすれば、卵を今ほど気軽に買にくくなるだろう。

動物が生まれてから死ぬまで、その動物本来の行動をとることができ、幸せでいられることをアニマルウェルフェアという。動物がよりよい環境で暮らせるようにすることもこの取り組みの一つだ。しかし、そのような取り組み自体の認知度が日本は他国と比べて低いと言われている。私自身も新聞記事を読むまでは、豚がせまい場所で暮らしたり、鶏が一生を小さなケージの中で終えることを知らなかった。しかし、EUでは妊娠ストールやバタリーケージが禁止されている。アニマルウェルフェアに取り組む農家に補助金を出す国もある。それらの国々は、国民がアニマルウェルフェアに関する情報を知り、ひどい飼育環境を批判したことによって政府が法令を整備した。

「どうせ食べられてしまうのだから、豚が狭いところで育てられているかどうかなんて関係ない。それだったら安く提供してほしい。」という人もいるかもしれない。同じブランドなら、飼育環境が違っても同じ味だと言う人もいる

だろう。

しかし、妊娠ストールで育てられている母豚の目は、諦めた気持ちを感じる、悲しそうな目で、放牧され、気持ちよさそうに眠る豚の姿とまったく違う生き物に見えた。人と同じように豚にもあるはずの一つ一つの個性は、妊娠ストールによって消され、豚を豚でなく、商品にしてしまうのではないだろうか。平飼いの卵を手にしたとき、スーパーの卵とは違う、温かい生命力を感じた。この卵を産んでくれた鶏に感謝しなければと思った。そんな想いは、動物が幸せに生きているから生まれるのではないだろうか。生まれてから私たちの手元に届くまで、一度も喜びを感じたことのない動物がいるかもしれない。そんな動物よりも、平飼いで楽しく一生を終えて、私たちの手元にやってくる動物を私は選びたい。命をいただくということ。広くたくさんの人が理解を深めて、向き合うことができればいいと思う。

に思い切り叩きつけていた。そして、地面に転がって飛べなくなったセミが、それでも懸命に羽を動かしてジタバタともがく姿を指差して楽しそうに笑っているのだ。セミはこのためにつかまえたのだ。次々と叩きつけられていくセミ。残酷な光景に目を疑いながら私はそう思った。私は見ていることしかできなかつた。その子供たちは、一度叩きつけられたセミを何度も何度も叩きつけた。おそらくだが、すっかり弱ってほとんど動かなくなった蝉に飽きたのだろう。彼らはさらに恐ろしい言葉を口にした。手足や羽を引きちぎって踏む。そんな内容だった。私はそれを聞いた瞬間、見ていられなくなって走り出し、子供に向かつてたった一言。

「やめた方がいいんじゃないかな。」

それが私のできる精一杯だった。子供たちは私が彼らより年上で、知らない人だと見てとると、何も言わずに走ってどこかへ行ってしまった。私はそこら中に散らばった弱ったセミを拾って木の側に返した。もうこのセミたちは二度と飛べないだろう。そう思いながら家に帰った。私はこの日の事をずっと後悔している。夏になる度に思い出して、私にできることはもつとあつたはずなのにと考える。もし、私にもつと勇気があれば。考えても仕方の無いことを考え

自分の考える命の大切さ

大阪市立住吉第一中学校 三年二組 谷元 絢音

パンッ！何かを叩きつけるような音が辺りに響き渡る。幼い子供の楽しそうな笑い声。その繰り返し。これは私がずっと忘れられないある夏の出来事である。

ある日の学校からの帰り道、とても暑い日だった。セミの声がうるさい程に鳴り響く、夏の青空がまぶしい普通の日だった。友達と帰り道の途中で別れて、一人で家に向かう道にある公園の前を通った。楽しそうな声が聞こえると、思い顔を上げると、私よりも幼い子供たちが数人いて、セミとりをしていた。私はその様子を見て、自分もあのくらの年の時、セミとりをしていたことを思い出して懐かしく、なんだか微笑ましい気持ちになった。そんな気持ちで公園を通り過ぎようとした。その時だった。パンッという音がして、続いて子供のはしゃいだ声が聞こえた。何だろうと思って振り返ると、子供たちがつかまえたセミを地面

る。私はあの時、どうすれば良かったのかと。そもそもなぜあの子供たちはあんなことをしたのだろうか。私は、彼らにはまだ善悪の区別がつかなかったのだと思う。だから、虫をただのおもちゃとして認識していたのだろうか。そう考えた。そして怖くなった。私もそうだったのではないかと。その時私はふとなぜ大人は、子供に虫とりを教えるのかと疑問に思った。そこで、インターネットで調べてみることにした。

虫とりの目的は、子供の五感を刺激して運動を促し、虫や自然と触れることで感受性を豊かにするためであるそうだ。その過程に発生する子供の残酷ともいえる行為については、自分のおもちゃを分解してみる心理と同じ好奇心だから、命の大切さを知っていくためにも、よほど猟奇的な目つきをしていたり、エスカレーターしたりしていない限りは見守るべきとのことだ。それを見て私は、複雑な気持ちになりながらも納得した。

あの夏の日、起こったことはおそらくこれからも忘れないうだろう。子供の残酷な行動は、好奇心故に仕方のない事で、命を知っていく上で重要な事である。そう分かっている、私もそうだったかもしれないと思うと怖くなる。ある人にそう話したことがある。そう言うと、その人はニコ

ニコしながら、
「そんな難しく考えなくてもいいやん。その事を後悔して
るんやったら、これから気をつけたらええねん。大事な
は過去じゃなくて、未来やで。」
と言った。ハッとした。その通りである。重要なのは私が
これからどうしたいのかだ。だから私はこれから、自分が
考える命の大切さに基づいて行動できるようにしていきたい。
い。



●小学生一年生

いのちのおと

神戸市立春日台小学校 一年 太田 咲南

小さいのちの大きな力

神戸市立こうべ小学校 一年 関 優斗

わたしのいのち

姫路市立手柄小学校 一年 中川 愛絆

●小学生二年生

生きているだけで

堺市立北八下小学校 二年 眞鍋 亜美

言葉でこわれる命

私立智辯学園和歌山小学校 二年 谷坂 しえり

命について

大阪府市立孔舎衛東小学校 三年 野口 真桜

やさしさのバトン

市川町立瀬加小学校 四年 中塚 咲都

毎日の幸せ

私立近畿大学附属小学校 四年 酒井 麻衣

たく山の命にありがとう

私立智辯学園和歌山小学校 四年 神埜 明奈

死ぬときってどんな感じ？

私立智辯学園和歌山小学校 四年 根来 果歩

母が命の絵をかいた

私立立命館小学校 四年 猪股 愛

つながっていきいのち

姫路市立安室小学校 四年 高田 康介

つながるいのち

私立立命館小学校 二年 杉本 青芭

ぼくの大せつないのち

姫路市立旭陽小学校 二年 苦瓜 海

●小学生三年生

平和ってなんだろう

茨木市立茨木小学校 三年 永安寺 悠

ぼくにとつての「いのち」

岸和田市立八木小学校 三年 樋口 日佐人

みまもっていてねきほちゃん

京都市立下鴨小学校 三年 河野 鈴

わたしとお母さんのたからもの

神戸市立塩屋北小学校 三年 中川 紗愛

●小学生五年生

「生きる」とは

神戸市立鹿の子台小学校 五年 西元 悠人

オカメインコのがっちゃん

神戸市立神の谷小学校 五年 直原 惺南

わたしにとつての、いのち

堺市立津久野小学校 五年 森 祈里

幸せな最期とは

大阪府市立英田北小学校 五年 渡邊 豪

戦争と命

姫路市立安室小学校 五年 石田 響一

当たり前ではない命

姫路市立安室小学校 五年 相馬 美沙希

●小学生六年生

当たり前前ではない今日を生きていく

大阪市立中之島小学校 六年 加賀谷 空

命の時間

加古川市立平岡小学校 六年 井上 宙奈

一人の小さな声も集まれば大きな声に

京都教育大学附属京都小中学校 六年 宮本 百

「死にたい」という気持ち

堺市立庭代台小学校 六年 河合 柾果

いろいろな命

姫路市立広畑第二小学校 六年 柴田 葉乃

死してもなお生き続ける

舞鶴市立中筋小学校 六年 川角 星愛

大好きな祖父

私立関西学院中学部 一年 高瀬 桂

ありがとう

私立滝川第二中学校 一年 吉田 香里菜

思い出の味

私立滝川中学校 一年 深澤 宥輔

「意識」と「行動」

私立桃山学院中学校 一年 土本 杏椰

「生きる」ということ

高島市立安曇川中学校 一年 青木 陽真

かけがえのないいのち

彦根市立西中学校 一年 中嶋 元人

命の誕生は奇跡の瞬間

八幡市立男山東中学校 一年 後藤 亜実

●中学生一年生

祖父との別れで学んだこと

岩出市立岩出中学校 一年 千本 七海

命

大津市立仰木中学校 一年 竹中 颯花

命はあたりまえじゃない

小野市立小野南中学校 一年 小林 茉尋

何気ない日常の楽しさ

門真市立門真はすはな中学校 一年 藤本 旋汰

当たり前前の日常

京都市立開晴小中学校 七年 橋詰 仁心

家族の笑顔

神戸市立盲学校 一年 北口 緋希

●中学生二年生

私にとって「いのち」とは

大山崎町立天山崎中学校 二年 山田 沙也香

一つの命だけでも

小野市立小野南中学校 二年 奥野 日和

生まれてきた意味

京都市立音羽中学校 二年 安島 依空

三十分

神戸市立神陵台中学校 二年 上野 柚音

曾祖母がつないだ命

神戸市立本庄中学校 二年 森井 陽太

かけがえのない光

神戸市立盲学校 二年 本木 陽菜

ヤギのいのちのあたたかさ

私立近江兄弟社中学校 二年 勝瀬 咲織

「生きる」命

私立神戸学院大学附属中学校 二年 奥谷 翔太

心といのち

たつの市立新宮中学校 二年 上田 樹

命は回っている

播磨町立播磨南中学校 二年 田中 琉稀

すぐれた能力と心の支え

東近江市立五個荘中学校 二年 甲斐 萌愛

「生きる」ということ

兵庫県立大学附属中学校 二年 白井 志歩里

いのち

●中学生三年生
尼崎市立中央中学校 三年 坂本 輝

生きる

尼崎市立中央中学校 三年 谷口 陽南

僕の家族

尼崎市立中央中学校 三年 當眞 瑠生

命の重さ

岩出市立岩出中学校 三年 土橋 來夢

ありがとう

大阪市立住吉第一中学校 三年 岡本 真生子

人が生み出した「命」

大津市立仰木中学校 三年 小松 紗幸

いのちをみがく

大津市立仰木中学校 三年 中川 芽生

つながれた僕のいのち

姫路市立大白書中学校 三年 福本 光起

言葉と命

大津市立日吉中学校 三年 早瀬 ことみ

今を生きる

野洲市立野洲中学校 三年 三輪 空宙

灯り続ける

京都市立音羽中学校 三年 中山 心咲

あたたかい毛布のように

京都市立下鴨中学校 三年 黒岩 環

いのちへの感謝

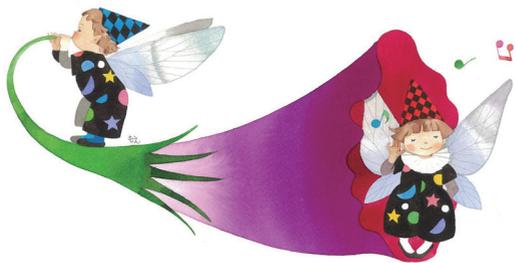
神戸市立有馬中学校 三年 松本 樹

大切な命

神戸市立高倉中学校 三年 藤井 茜

入院生活を通して感じたこと

滋賀県立守山養護学校 三年 辻崎 月琉



選考を終えて

この作文、なにもないところから、よくがんばりましたよねー。

昨年12月5日に開かれた最終選考会で、選考委員の一人が、ある入賞作品を評して笑顔で語った言葉です。ぼくはそれを聞いた瞬間、なるほど、と大きくうなずきました。「いのち」について作文を書くことの意味や意義が、ここにあり、と思ったのです。

「なにもないところ」とは、特別な環境だったり、珍しい体験をしたり……というのではない、ごくあたりまえの日常のことです。

たしかに、その作品は、びっくりするような出来事を描いたわけではありません。どこにでもありそうな家族の物語でした。でも、書き手はそれをほんとうにいていないに、こまやかに、愛情を込めて文章にしてくれました。そこに選考委員は皆、胸を打たれたのです。

ぼくたちは「いのち」について思いをはせたり考えをめぐらせたりするとき、ついつい、なにかスゴいことと結びつけてしまいがちになります。無理ありません。「いのち」はとても大きいのに「どんな形なの?」ときかれると困ってしまう。とても身近なのに「どこにあるの?」ときかれるとうまく答えられない……。難しいよね、ほんとに。

だから、そんな「いのち」の難しさに負けないようなスゴいできごとがないと、作文なんて書けない、と思ってしまうんですか? フツウの毎日を送っている自分には無理だよ、なんて決めつけていませんか?

心配ご無用。皆さんの家族を、友だちを、毎日の生活を、ふだんよりほんの少し優しさを増したまなざしで見つめてみると……きっと、あちこちに「いのち」が息づいていることに気づくはずですよ。

お手本は、皆さんが手に取っているこの冊子の中にたくさん収められています。入賞作品は「その気持ちわかる!」「そう、自分も同じ!」と声をあげたくなるものばかりです。

さあ、ぼくのあいさつはここまで。ページをめくって、数々のすてきな「いのち」の物語に出会ってください。

選考委員代表

重松 清

選考委員 菊池 省三
選考委員 重松 清
選考委員 津村 記久子
表紙・カットイラスト 永田 萌

2024年度 小・中学生

「いのち」の作文コンクール作品集

2025(令和7)年1月発行

編集・発行 公益財団法人 JR西日本あんしん社会財団
〒530-8341 大阪市北区芝田二丁目4番24号